

5月逝去教役者記念聖餐式説教 学び続けることと仕え続けること

私がこの前、逝去教役者記念聖餐式で説教したのは、昨年末の12月でした。半年もしないうちに新しい順番での説教が回って来たので、イースター礼拝が終わって、5月の逝去教役者の名前を見ながら何を語るべきか考えていました。今月は、12人の名前が挙がっていますが、私はそのうちの5人の先生たちと関わりがあります。こんなに大勢の先生たちの逝去記念礼拝に説教するのは初めてです。今までは5月に当たったことがなかったので、改めて一人ひとりのことを考えました。

私が九州教区の礼拝に初めて出席したのは、1979年の6月。中村正司祭の司祭按手式でした。私は当時大学生で、京都に住んでいましたが、神戸に住んでいた中村司祭のお母さんと神戸修道院の村松宣夫修道士、そして当時広島教会の牧師をしていた、中村司祭の兄、中村豊司祭、のちの神戸教区主教とその礼拝に出席しました。その時、説教されたのが、27年前の5月24日に逝去された、村上豊吉司祭でした。その話される言葉が大変分かりやすい、心にスッと入ってくる内容で、「あなたはこれから人を漁（すなど）る漁師になるのだ。」という言葉が言われたのが一番印象に残っています。礼拝を終わって京都へ帰る途中、中村主教と、村上先生の説教にお互い感激したことを話しました。そして「日本列島の端っこに、あんなすごい先生がいるんだなあ。」と語り合ったことでした。

この頃の司祭按手式は文語の祈祷書で行われていて、按手式の前は、早禱式が行われていました。早禱式とは、現在の朝の礼拝のことです。聖職団の中で、ストールを着けていない、大変立派な印象の先生が司式しておられるので、式次第をみたら、堀之内孝夫伝道師と書かれていました。今から20年前の5月2日に亡くなった堀之内司祭です。先生は長年大口幼稚園の園長をされていて、若い時1年間ウイリアムス神学館で学ばれた方でした。按手式のすぐ後の8月、私は約1か月を九州の教会で過ごしましたが、久留米の天使幼稚園で堀之内先生と会い、また、大口聖公会で青年のワークキャンプがありましたので、私もそれに参加すると、堀之内先生はきれいな箱に入った焼酎、伊佐錦を二つ抱えて来られて、私に「これを京都の森議主教とウイリアムス神学館の法用司祭に渡してほしい。」と言われて、預かって帰ったことがありました。お二人に渡したら、それぞれから堀之内先生に礼状が来たらしく、特に森主教からの手紙が、堀之内先生に言わせると、「森主教があんな人間的な手紙を書かれるとは驚いた。」と私に伝えてくださったのを覚えています。

その数年後、九州教区は末藤秀夫司祭が45歳の若さで大腸ガンのために亡くなり、聖職の不足が問題になり、九州教区は堀之内先生を説得して、司祭になっていただいた、という経緯があります。そして、私が神学校を卒業して八幡の教会に2年間勤務したあと、八幡の教会の牧師として働いてくださいました。当時八幡にはお風呂がなかったので、約半年はそれまでの私同様に神田湯という銭湯に通っておられました。その頃だったと思いますが、堀之内先生から1冊の本をいただきました。カトリックの神父さんで、新宿の歌舞伎町でサラリーマン相手にスナックのバーテンをしていたジョルジュ・ネランさんの「おバカさんの自叙伝半分」という本でした。この本の中に、クリスチャンとは、イエス様のファンであって、聖書に記されたイエス様の言葉や行動のひとつを選び取って、それを手本にして生活するのがクリスチャンの霊性というものだ、ということが書かれていて、その頃から私自身は、感激した村上司祭のような、人にわかる説教をする努力の必要を感じるようになったのでした。

私が八幡と福岡で伝道師、執事、司祭となって大牟田の教会の牧師を8年余りしておりました間、柴田司祭や太田執事と親しくいろんな話をしたり、私がイギリスの古いカテキズムの本を訳している時、いろいろアドバイスをしていただきましたが、その後大分へ移り、大分聖公会の牧師になりますと、そこには副牧師で英語の先生をしておられる武藤久太先生がおられました。武藤先生は神学校を途中で退学されて、高校の教師、そして大学の教員をしておられましたが、やはり堀之内先生と前後して、特に武藤司祭の場合は教区からは給与をもらわない、特任の司祭として働かれました。先生の英語についての専門分野は、**etymology** (エティモロジー) と言って、言葉とその意味の語源や歴史についての学問でした。非常に地味な学問ですが、私も武藤司祭の影響をうけて、英語語源辞典という大きな辞書を買ったりしました。

大分にいる間、最後の3年間、九州教区の教育部長を担当していましたが、最後の2年間は通信教育をして、毎月アングリカンというテキストを受講者に送っていました。そのアングリカンという言葉の語源を調べるのに、武藤司祭の影響で買った辞書が役に立ちました。アングリカンという聖公会の呼び方は、どうも最初は古代ローマあたりで使われていた **Anglii** アングリーというラテン語で、ドイツ北西部から4世紀末にイギリスに民族大移動で移り住んだアングル族を意味する言葉のようです。最初住んでいたドイツの土地が釣針(アングル)のような形をしていたので、ローマ人がそう呼んだのが語源だと辞書にありました。どうも武藤司祭には、重量挙げの選手として活躍された印象ばかりが強いのですが、私には、英語の言葉の語源を調べる先生の仕事からの影響が強かった印象です。そんなことから、最近「み言葉の礼拝」というのも、イギリスの教会の「**a Service of the Word**」というのが、どうも日本の式文の目的とは全く違う立場で作られていたことなど、発見することになったわけです。

さて、私が大分に移って1年した後、1997年春、菊池黎明教会で牧師補をしていた太田執事と二人だけで聖地旅行をすることになりました。この時の旅行記は太田執事が出した「自分の十字架を背負って」という本の中に詳しく載っていますし、昨年の教区報7月号に、追悼の文章に私も載せています。太田執事との旅行はその時が1回目で、その後、2004年、私が熊本に移ってからですが、同じ洗礼名のフランシスの足跡をたどる、ということで、イタリアのローマとアッシジに行き、2006年には、黎明教会の高橋さんたちにも介助をお願いして、太田執事と2度目の聖地旅行ということになりました。

太田執事は、自分が元ハンセン病患者で体が不自由だからということで、いろんなことを断念するのが嫌で、九州の療養所に来る前には、戦後ずっと群馬県草津の栗生楽泉園で14歳の時から生活していましたが、ハンセン病患者の伝道はハンセン病患者自身が行うべきだ、という考えから、岡山の長島愛生園の中に作られた長島聖書学舎で、他の教派の人々と一緒に聖書だけでなく、神学全般を学びました。その間に知り合った奥さんの清子さんと草津に戻りました。奥さんは広島出身で、ハンセン病にはかかっていなかった。誤診によって療養所に入れられたわけです。親子ほど年の違うアネさんというよりお母さん女房だったのですが、元気な奥さんがついていたので、日本中あちこち旅行されたようです。清子さんが亡くなって、落ち込んでいる時に、当時熊本の牧師であった廣石司祭や飯田主教からの誘いに応じて、九州に来られたわけです。九州教区で働き始めたのは私の方が半年早かったのですが、別府で開かれた教役者会で知り合い、私が当時出始めのワープロで週報を作っているのを見せたら、ご自分のもっとずっと高い、東芝のワープロを奥さんの残した金で買ったことなど話してくださいました。

その後、太田先生はパソコンを始めました。パソコンでいろんなことができる、ということがわかり、私は彼からホームページの作り方を教えていただいたいて、私のパソコンにはその頃からのデータが溜まってきました。私が現在働いている宮崎聖三一教会のホームページにたくさんの資料が入っているのは、きっかけは太田執事によります。その頃、私と太田執事は、飯田主教を相手に、いろいろ文句を言ったり、臨時教区会を開かせたり、といろいろ騒いだ時期がありましたが、「そろそろ飯田主教のために、将来役立つことを考えよう」と太田執事が言い出して、教区を5つの伝道区に分けて、司祭不足を補う体制づくりをしたこともありました。実験的に2年間行ったのですが、教区の教役者や信徒の思惑がいろいろあって、伝道区はなくなり、協働教会という形だけになりましたが、もしあの伝道区が続いていたら、教区の各教会や教役者・信徒の間の協働関係も変化していたのではないか、と思ったりします。

さて、最後になりましたが、柴田司祭の話をしします。私が大牟田から大分へ移って2か月もしないうちに、親しくしていた柴田尠二司祭が亡くなりました。もう21年前のことですね。柴田司祭は村上司祭と同じ年齢で、一緒に司祭になられました。戦後1年間アメリカへ留学された後、大分の聖公幼稚園の園長もしながら働いて来られた先生です。定年の少し前に佐世保に移られました。私は大学を出て神学校に行く前に佐世保にお訪ねしました。そして私が教会で働こうと思ったきっかけになった疑問を先生にぶつけました。私の出身の広島県福山の教会は、私が高校生になった頃、保育園を始めて、礼拝堂が保育室になって、日曜日にしか礼拝できない状況になったこと。牧師さんに給与を渡すことがなかなか難しかったけど、保育園で牧師が園長になると、教会は経済的に助かった。牧師の給料よりも高い給与を保育園から貰えて、教会は牧師に給料を払わず、献金がたまって、パイプオルガンまで買った。でも礼拝に出席する人々が減ってきた、という状況にありました。

私が柴田司祭に質問したことはこうです。「教会と教会の付属施設は、経済的にどのような関係にあればいいのでしょうか。」ということです。すると柴田司祭は、「教会と付属施設は、お互いに独立してやれるならそれが一番いい。しかし、もしどちらかが助けてほしい、ということなら、たとえば教会が幼稚園を経営的に助ける、ということなら健全だろう。しかし、それが逆なら、問題がある。」そういう話でした。その時の柴田司祭の言葉は、今も私には強烈な印象として残っています。教区の今後の事業などのことを考えると、改めて柴田司祭の言葉を思い出して考えたいと思います。

私は柴田司祭の葬式の前の通夜の祈りで話しましたし、また何人かの聖職按手式にも話しましたが、柴田司祭から特に二つのことを教えられたように思います。それは学び続けることと仕え続けることです。

私が大牟田の牧師をしている時、福岡で会議がある日には、それが終わると、柴田司祭の所に泊めていただいていた。私が泊まるから、ということで、先生は朝から布団を干したり、夜に話をするために酒の肴を手に入れたり、と準備をしてくださっていました。私の父より20歳くらい年上でしたので、私は息子というより孫に近い年齢差でしたが、そんな私のために食事や寝る場所の用意をしてくださりました。柴田先生は、足が悪くて杖をついておられたのですが、それでも接待のために準備をされていたのです。そして、最近どんな本を読んでいるか。どんな面白い本があったか、とお互いそれを見せ合うような習慣ができました。神学の学問は常に新しい状況に沿って学び続け、考え続けなければならないこと。そして、人々から「先生、先生」と言われて持ち上げられても、決して仕えることを忘れてはいけない。そのことを私は柴田司祭をはじめ多くの先輩から教えられてきたように思います。